

第59回通常総会・第87回講演大会記事

本会第59回通常総会、第87回講演大会は千葉県習志野市の日本大学生産工学部で4月2日、3日、4日の3日間開催された。

第87回講演大会 4月2日、3日、4日の3日間にわたり、339件の講演が専門別10会場に分かれて行なわれた。また上記のほか下記の5テーマの討論会が行なわれた。

1. 高炉燃焼帯の挙動
2. 鉄鋼精錬における界面現象
3. 圧延機の矯正について
4. 鋼の強靱性
5. 鉄、その他 BCC 金属のクリープと格子欠陥

第59回通常総会 第59回通常総会は4月2日午後1時より日本大学生産工学部12号館B教室で開かれた。田畑専務理事司会のもと中野会長より次のような挨拶があつた。

「本日ここに多数の先輩方を始め、会員諸兄ご臨席のもとに、日本鉄鋼協会第59回通常総会を開催するに当り会長として一言ご挨拶を申し上げます。

「本来ならば昨年行いました協会事業並に今昭和49年度事業計画に触れ併せて私の考え等申し述べべきかと思いますが此あと事業報告事業計画に就いては渡辺副会頭からご説明致す予定となつておりますので此点は省略させていただきます。

私が皆様方のご推挙によつて会長に選ばれましたのは2年前の総会でありました。その時から今日までの2年間の振り返つてみますとこの短期間のうちに実に目まぐるしい変化が起つております。まづ昭和47年という年は不況克服の努力に明け暮れた年であつたと云えると思ひます。鉄鋼業界に於てはいくつかの不況カルテルが結成されその中心になつた高炉メーカーのカルテルは昭和46年12月8日から始められ47年の12月の末まで続いたのでありまして47年は1年間全部不況カルテルの下で過したのでありました。そして年末に向うに従つて鉄鋼需要も徐々に高まり長かつた不況から脱出し得たのでありました。昨48年に入ると景気は急激に回復して春以降は一転需要に供給が追いつかない状態となつて初夏から秋口にかけては末端需要家の鋼材入手難が大きな問題となり通産省の要請に基いてこの入手難解消のため種々苦勞をしたのでありました。このように急激に極端な変化があつたせいもあり現在では永く苦しかつた不況の時期が1年一寸前まであつたことをとすると忘れ勝であります。

続いて10月6日に突然起きました第4次中東戦争を契機として世界中をゆさぶりましたいわゆる石油危機はわが国にも大きな打撃を与えわが国社会は今なお混乱の渦の中に居るのであります。1960年代とは全く様相を異にし鉄鋼界を困む環境はいわゆる猫の眼の変るように急がわしく変化し、而も好転といえる面は非常に少なく益々厳しくなる一方であります。

こうした時機にどう処したらよいでしょうか。いたず

らに右往左往するのは愚の骨頂であり平静に併し迅速に変化に対応し各々が受け持つ持場における責任遂行のため一層の努力を傾注することこそ問題解決に最も必要であると私は思うのであります。

今後多くの変化が短期間の中にいろいろと起つて来る可能性は十分に考えられます。こうした変化に対し平静かつ迅速に対応するためには各分野における研究努力によつて問題解決への十分な実力と自信を持つておくことが必要であります。力を貯え大きな自信を持ち続けておらねばならないと考えるのであります。いずれにしても世界の鉄鋼需給は今後も供給不足の傾向を持続するであろうと予測されております。日本が更に供給能力を増加させて悪い訳はありません。併し公害問題を始め労働力不足の問題、エネルギー問題原料問題等々の国際競争力を低下させる多くの障害が横たわつて居ることは確かであります。過去にもいろいろの障害がございましたが、これらを克服して今日のわが国鉄鋼業を築き上げて来ました。

今後われわれの研究努力によつて各障害を一つ一つ取り除きわが国鉄鋼業をさらに発展させて行くことこそわれわれ協会員に課せられた務めであると考えまして皆様の一層のご活躍を大きく期待いたしております。

さて本年はこの通常総会のあと世界鉄鋼業の指導的立場におられるエリオット博士ならびにヤボイスキー博士を本会の名誉会員にご推挙申し上げることになつておりますが、両博士と本会とがより強いつながりを持つようになりますことは本会にとりまして誠に力強く、ここに両博士に対し最大の敬意を表する次第であります。またこの名誉会員推挙式に続いて服部賞を始め鉄鋼協会各賞の授賞式が行われます。

これ等の賞をお受けになる方々のご業績に深い敬意を表しますと共に心からそのご受賞をお喜び申し上げます。そして今後一層のご研讃を希うものであります。さて私この総会を機に2年間の任期を終つて会長の職を退くことになつております。そこで最後にこの2年間会長の私にお与え下さいました諸先輩、役員、会員の方々並に事務局の皆様のご指導ご協力に対し心からお礼を申し上げますと同時に今後新会長の下、協会が益々発展せんことを祈念いたしておることを申し述べ私の挨拶を終らせていただきます。」

ついで議事に入り、理事、監事ならびに評議員選挙が行なわれた。別室において開票をしている間に昭和48年度事業報告、収支決算および財産目録の件ならびに49年度事業計画ならびに収支予算の件を一括議題に供して審議に入り、渡辺副会長より次の事業報告がなされた。

昭和48年度事業報告ならびに昭和49年度事業計画について、ご説明申し上げます。

日本鉄鋼協会はわが国における鉄鋼に関する学術・技術に関するそのほか関連事業を活発に行ない会員の皆様にご奉仕し、またご要望に添うべく努力いたしておりますが、とくに最近わが鉄鋼業界において産業政策上または

国民生活安定上緊急に開発を要請されている公害、環境保全並に原子力平和利用など科学技術上、重要な問題解決のため鉄鋼業界、関連業界および関連団体のご協力のもとに共同研究体制が結成され、さらに通産省のご理解もあり重要技術研究開発費補助金を得て共同研究を実施し、数々の成果を挙げて昨年終了しましたものうち、2、3その成果から先に申し上げたいと存じます。

まず公害問題に関しましては、昭和46年度から開始の高炉メーカー9社による排煙脱硫試験研究では、焼結炉排煙中のSOXを除去するための循環プロセスの工業化試験が終了し、硫安法および石膏法による2つの回収プロセスの工業化に成功しました。この試験結果は、委員会報告として詳細参加各社に報告されましたが、昨春秋の講演大会でその概要が報告されましたことは皆様ご承知のことと存じます。

また、原子力問題につきましては、鉄鋼業および関連業界参加により当会原子力部に熱交換器並に還元ガス製造の2つの小委員会が設けられ、昭和46年よりこの応用研究が昨年まで実施され還元ガス製造研究では、低品位重質油のガス化条件また同ガス化装置の大型化への有効資料が得られ、熱交換器製造研究では、ヘリウム・ループによる水蒸気の伝熱特性ほか関連の貴重な実験データが得られました。これら共同研究の成果が基盤となり、昨年5月には国家的規模による大型プロジェクトとして「高温ガス利用による直接製鉄の研究開発」に進展することとなり原子力製鉄技術研究組合の設立、また環境保全上一層排出規制が要求されるNOX除去のため、鉄鋼業窒素酸化物防除技術研究組合が本年3月に設立認可されましたことは、わが鉄鋼業がこの厳しい社会情勢の中で発展していくためには、まことに喜ばしい限りと存じます。当協会ではこの両研究組合の設立に参画しており、技術面で今後とも協力したいと存じております。

このほか先に進められておりました大型プロジェクト開発研究「航空機用ジェットエンジン」に関連しまして耐熱材料の開発を目指し、44年度から東大および金材技研のご指導によるジェットエンジン用耐熱合金研究委員会で開始した共同研究は、熱疲労特性解明のための新たな熱疲労専用試験機の試作の成功並に現在用いられている数種の耐熱合金に関し、その熱疲労特性値を外国材との比較も含めて成果を得て昨年試験を終了しました。この試験結果の概要は、今回開催の講演大会中に発表されますので、詳細はその方でお聴きいただければ幸と存じます。

次に、情報化社会といわれる今日、科学技術情報の開発を推進すべく日本科学技術情報センターおよび金属関連九学協会と共同によるシソーラス作成委員会を昨年設け、2年間の計画で48年度より、情報検索用語関連辞書ともいべき「金属工学シソーラス」の作成に当っております。これは自転車等機械振興会より補助金の交付が決定しております。

ついで、共同研究会は15部会21分科会の機構により鉄鋼製造技術の全般に関し現場の立場から現在最も問題視されている公害、環境保全、省力化、合理化、省エネルギー化などを含めて各部会、各分科会の角度から検討を重ね調査研究結果の発表、分科会報告の作成、お

びシンポジウムの開催など活発な調査研究活動を行なっており、数多くの成果が報告書として発表されております。

さらに、鉄鋼基礎共同研究会は日本学術振興会、日本金属学会および当会の三者共同運営により基礎研究を五部会で行なっており、この研究結果はシンポジウムの開催により、また報告書として刊行され、これまで多くの成果を上げております。本共同研究会は、大学および公立並びに民間の各研究機関における精鋭なる研究者を中心に行なわれ、学術技術の基礎を迫及する研究の場として最も意義あるものと期待されております。

つぎに、標準化委員会は工業技術院および関連協会と緊密な連携のもとに生産者、使用者および中立者の協力を得て、わが国における鉄および鋼に関するJISの見直し、および改正JIS原案の作成、JIS規格体系の調査など、また国外に関してはISO国際規格原案の審議、共同実験、コメントの作成、およびISO国際会議への代表者の派遣などわが国の国際的進出を積極的に推進し、日本の意見の反映に努めております。かたわらJIS化しにくいもの、またはJISを補完するための民間規格制定の要望に対しては、他委員会の協力を得て漸次データの取りまとめを行なっております。

当会における会誌、図書の編集、刊行、見学会、表彰事業は各委員の積極的なご指導により、広範にわたる活発な活動を展開しております。昨年度は前年に比し投稿論文も2割増となり、共同研究会各部会からの推薦技術論文、ならびに講演大会における論文の投稿は春秋併せて691件に達し、前年に比し100件余と大幅な増加を示しております。これはわが国、鉄鋼科学技術進歩の隆盛を如実に物語るもので、この事業に携わる当会としましては意を強するものであります。このほか翌50年は当会60周年を迎えますので、本年度は記念事業として60周年記念特集号の編集に着手する予定であります。

国際技術の交流につきましては、昨年は5月末から6月はじめにかけて第4回日ソ製鋼物理化学シンポジウム(2日間)、第4回真空冶金国際会議(5日間)、第4回E.S.R.国際シンポジウム(2日間)の三つの国際会議が相前後して当会の主催で東京で開催され、盛会裡に終了しました。本年度は5月中旬に西独デュッセルドルフで第2回鉄鋼技術国際会議が開催されますが、この会議は昭和45年に当会が第1回会議を東京で開催し、その成果が世界関係学会に高く評価されたことによるものであります。当会では積極的に参加し、多数の報告を発表する予定であります。そのほか、当会の国際鉄鋼技術委員会は国際鉄鋼協会(IISI)の技術委員会に対する国内における窓口として活動しており、国連工業開発機構(UNIDO)および東南アジア鉄鋼協会(SEAISI)ではシンポジウムの参加並びに論文の提出など活発に中心的役割を果しております。今後とも、この種の国際会議を通じて技術交流はもちろん国際親善に寄与すべく尽力したいと存じます。

なお、その他各種委員会および本会事業の詳細につきましては、昭和48年度事業報告、収支決算ならびに昭和49年度事業計画、収支予算(案)をご覧いただきたいと存じます。また、当会事業に対し会員の皆様の認識

を深めると同時に協会のよりよき運営を検討すべく昨年来の協会事業のアンケートに関しましては、その調査結果を会誌3月号に集約しておりますのでご覧いただいたと存じます。当会としましては、是認されたものは忠実に履行し、ご要望に対してはその線に添うよう努力を傾けたいと存じます。

終わりに、日本経済は昨年10月以来のアラブ産油国における生産、供給制限による国際環境の悪化により深刻な打撃を蒙り、本年は戦後かつてない試練の年に直面するに至りました。わが鉄鋼業界は先頃の量より質への転換につづくこのたびの難局に対処し、新たな覚悟をもって克服することを期待します。このときに際し鉄鋼科学技術に携わる者の果す役割はきわめて重大であり、本会は総力を上げて使命達成に尽したいと存じます。

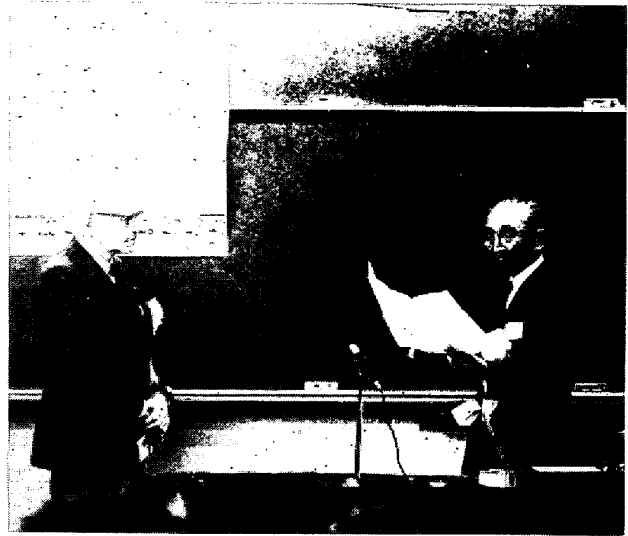
先輩各位、会員諸賢のご指導ご支援のほどをお願いします。」

ひきつづき細木理事より、昭和48年度収支決算、剰余金処分、財産目録、別途資金会計、補助金事業など会計ならびにその昭和49年度予算が報告された。

以上報告のあと鍵和田監事より監査報告がなされ、各議案とも満場一致をもって可決された。

つづいて先に行なわれた理事、監事ならびに評議員の選挙結果がまとまり、相馬、久保寺両選挙管理委員より理事改選15名、監事改選1名、評議員改選127名の各候補者全員が選挙の結果絶対多数をもって当選された旨の報告があつた。ここで一旦総会は休憩に入つたが、その間別室において臨時理事会が開かれ、会長、常務理事の互選が行なわれた。その結果会長に作井理事が、常務理事に吉田理事が選任され、総会は終つた。

名誉会員推挙式 総会につづいて名誉会員推挙式が行なわれた。初めに中野会長より推挙理由が述べられ、次の2氏に名誉会員推挙状ならびに名誉会員章が贈呈された。



名誉会員推挙状を受けられる Elliott 氏

名誉会員

John F. Elliott (MIT 教授)

V. I. Yavoiskiy (モスクワ鉄鋼合金大学教授)

表彰式 名誉会員推挙式に続いて下記受賞者の表彰が行なわれ、表彰状ならびに賞牌、賞金が授与された。

渡辺 義介 賞	藤木 俊三		
西山 山 賞	橋口 隆吉		
服部 賞	尾上 慎一	高畑 幸男	
香村 賞	西村 三好	吉田 進	
渡辺 三郎 賞	浅田 千秋	田口 悟	
俵 論文 賞	西尾 浩明	宮下 恒雄	
	森 一美	下田 輝久	
	神森 章光	出口 幹郎	
	大井 浩	関根 稔弘	
	河西 悟郎	矢野清之助	
	桜井 浩	三村 宏	
	脇田 信雄	小沢 勉	
	青木 宏一		

渡辺義介記念賞

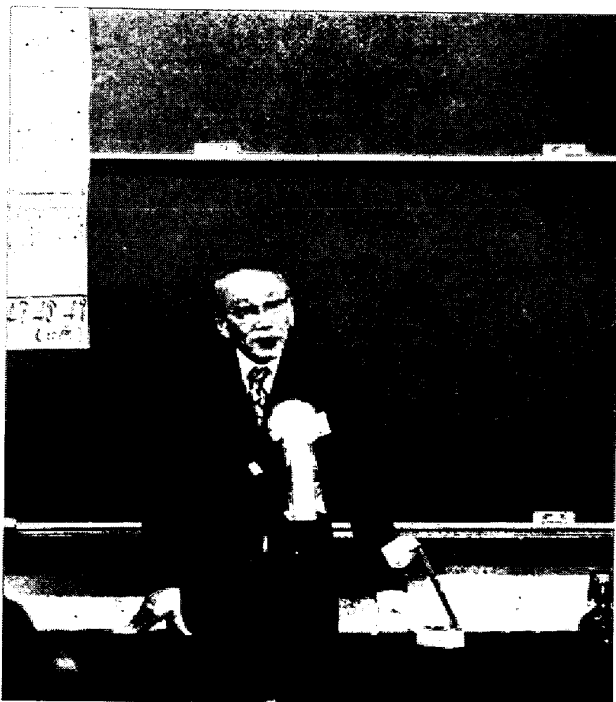
池田 稔	磯村 清
板橋 哲男	伊丹 高彦
上野 学	宇野 聖哉
岡 雄彦	逆瀬川浩次
下川 敬治	高沖 亮
富田 明	藤井 成美
松原 啓弑	水野 実

西山記念賞

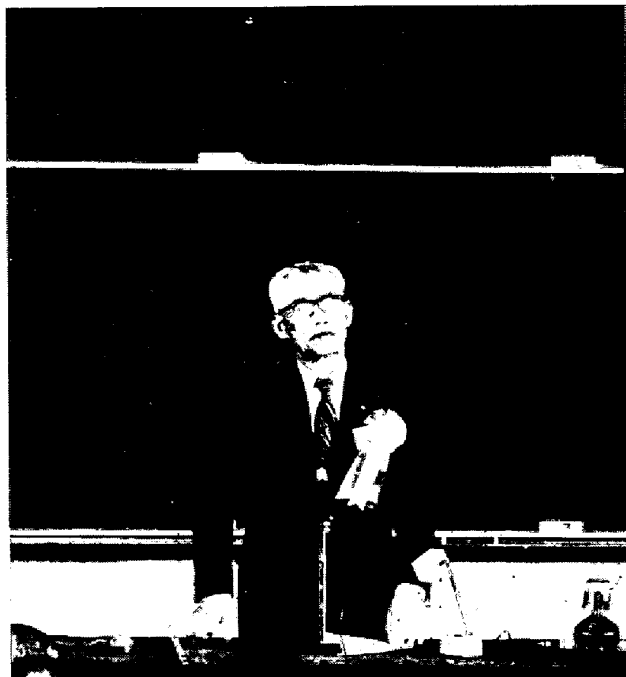
井樋田 睦	岡部 俠児
小野 陽一	加藤 栄一
小若 正倫	佐々木良一
鈴木 朝夫	須藤 恵美子
深瀬 幸重	松田 祥三

特別講演 4月2日表彰式につづき特別講演3題ならびに4月3日午前2題が行なわれた。

- 1) ストリップミルの発達をふり返つて
 渡辺義介賞受賞者 藤木 俊三
- 2) 鉄鋼その他の金属の内部摩擦について
 西山賞受賞者 橋口 隆吉



作井新会長挨拶



特別講演中の藤木氏

- 3) 湯川記念講演
Shape and Size of Deoxidation Products
Mit 教授 John F. Elliott
- 4) Formation of Deoxidation Products in Liquid Metals
MIT 教授 John F. Elliott
- 5) Early Iron Metallurgy in the Near East--c. 1000 B.C.

ペンシルバニア大学教授 Robert Maddin
懇親会 4月2日午後5時30分より日本大学生産工学部内食堂で日本金属学会と合同で開かれた。松下本会理事司会のもと参加者230名をなす盛況を呈した。

ジュニアパーティー 4月3日午後5時30分より大学食堂で開催された。参加者120名。